

### 1 自己評価及び外部評価結果

**【事業所概要(事業所記入)】**

事業所番号	0991300096		
法人名	株式会社 TAKK		
事業所名	認知症高齢者グループホーム さくらハウス		
所在地	栃木県那須塩原市高林1931番1		
自己評価作成日	平成28年9月21日	評価結果市町村受理日	平成28年12月8日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	<a href="http://www.kaigokensaku.jp/09/index.php">http://www.kaigokensaku.jp/09/index.php</a>
----------	---

**【評価機関概要(評価機関記入)】**

評価機関名	特定非営利活動法人アスク
所在地	栃木県那須塩原市松浦町118-189
訪問調査日	平成28年10月20日

**【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】**

小規模多機能事業所との併設のグループホームの為、それぞれのスペースの出入り制限は無く自由に交流している。近隣の小学校との交流や、中・高校生のボランティアの受け入れ、地域の方の慰問等も増え、認知症への理解や尊敬できる先輩であることを伝えている。年齢と共に心身機能が低下し介護度も高くなり介護量も増えているが、グループホームの時間の流れはゆるやかで、急がされる生活では無く、家庭的な雰囲気の中で「笑顔のあふれる暮らし」という理念を実践するため、職員が笑顔で寄り添い、入居者の笑顔を引き出している。

**【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】**

職員は、にこやかに優しく穏やかに利用者に関わっていて、理念にある「笑顔のあふれる暮らし」の実践に努めている。事業所の近隣には人家がほとんどなく地域との交流を持ちにくい状況にあるが、地元小学生との交流や中学生の職場体験、高校生ボランティアの受け入れを行い、地区の回覧版に事業所だよりを入れてもらったり、夏祭りへの参加を住民に呼びかけるなど、地域交流に向けて積極的な取り組みを行っている。運営推進会議には自治会役員や民生委員が毎回6〜7名参加して情報交換をしているほか、高齢者虐待や口腔ケア等の資料を用いて介護に関する学習をする等、事業所の運営に対する理解を深めてもらうよう努めている。過去に看取りの実績もあり、今後も利用者や家族の意向に応じられるよう体制整備を行い、できるだけ対応していく方針である。事業所近くに河川があり水害への対策も検討中であるが、あらゆる災害に向けて職員の訓練を行うなど、いざという場合の備えに万全を期することを期待したい。

**V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1〜55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します**

項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印	項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25) ○ 1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいの 3. 利用者の1/3くらいの 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19) ○ 1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38) ○ 1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20) ○ 1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38) ○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4) ○ 1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37) ○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12) ○ 1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49) ○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う ○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31) ○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う ○ 1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々々の状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:28) ○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない		

## 自己評価および外部評価結果

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>I. 理念に基づく運営</b>					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	法人理念の下、グループホーム独自の理念「笑顔のあふれる暮らし」を共有し、入居者は勿論、私達職員自身も笑顔ですごせるように実践している。	法人理念を踏まえて、職員で話し合っ作りだした「笑顔のあふれる暮らし」というグループホーム独自の理念を、職員はいつも念頭に置いてケアに当たっている。日常生活の様々な場面においても、職員がにこやかな表情で穏やかに接していることで、利用者も安心してゆったりと過ごしている様子が窺える。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	地域の小学校との交流会、中・高校生のボランティアサマースクール・マイチャレンジの受入れ等も実施し高齢者との交流を支援している。8月に実施した夏祭りには、ご家族や地域の方達を招きボランティアによる余興を行った。残念ながら地域の方の参加は得られなかったが祭り自体は好評だった。	毎年小学生との交流行事を行い、ボランティアサマースクール事業やマイチャレンジ事業を引き受けて中高生との交流も行っている。事業所の近隣に住宅がほとんどない状況ではあるが、地域自治会の回覧板に事業所だよりを入れてもらったり、夏祭りに住民の参加を呼びかけるなど、地域との関わりを深めるための取り組みを積極的に行っている。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	小学校との交流会や、中・高校生ボランティアサマー等で、認知症を有していても会話やレクを楽しめたり、昔の知恵を教わることができ、尊敬する大先輩であることを伝えている。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	家族の出席は少ない状況ではあるが、自治会長や民生委員の出席率が高い。2ヶ月に1度発行している「さくらハウス便り」を自治会で回覧してはどうかと勧められたこともあり、地域へのアピールと理解に繋げている。	市担当者や包括支援センター職員のほか、自治会関係者と民生委員が6～7名参加して、運営状況の説明や情報交換等を行っている。会議の際に、口腔ケアや高齢者虐待等の介護に関する資料を配付して、理解を図る試みもしている。会議の結果として、事業所だよりの地域住民への回覧や、夏祭りへの参加の呼びかけの実施に繋がっている。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	市町村との連携は図れている。	平日開催の運営推進会議には市担当者は毎回参加してくれるので、運営状況を伝えたり最新情報を教えてもらったりしている。日常的には、事故等の連絡や問い合わせ等を随時行っており、市と連携をとりながら運営に当たっている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	身体拘束をしないケアを実践している。玄関の施錠はせず、職員の付き添いで散歩に出かけたり、玄関周りの掃除も入居者と共に行っている。ベッドからの転落時の怪我等に備え、ベッド下に布団を敷き対応している。入居者の生活リズムを把握し忙しい時間帯に手薄にならないようなシフト調整も行っている。	『身体拘束ゼロへの手引き(厚労省関係資料)』を法人のマニュアルとしていて、身体拘束に該当する事象が起きないように職員への周知徹底を図っている。ベッドからの転落による怪我防止のために床に布団を敷いたり、言葉かけに気をつけたり、利用者の動きを常に職員が把握して適切に対応するなど、拘束につながることを心掛けている。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	高齢者虐待マニュアルを参考に定期的な勉強会の中で取り上げている。入居者の全身状態の観察を行いアザ等の確認と、精神状態の変化を見過ごさないよう職員間の連携も図っている。職員の精神的な変化にも気づけるよう、個人面談等も行っている。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	運営推進会議の議題に取り上げたり、勉強会の中で学ぶ機会を設けている。今後も継続的に学習していく。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約時に説明し不安等への対応も行っている。入居してから新たに出てきた疑問点に関しても、その都度対応できるようにしている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	運営推進会議への家族の参加は少なく、運営に関する意見を聞ける状況は以前から改善出来ていない。今年は夏祭りへご家族も招いたが、参加人数は少なかった。引き続き参加を促していく。	併設する小規模多機能事業所と合同で運営推進会議を開催している。家族にも参加を呼びかけているが、参加する人はほとんどいない。日常生活場面では職員から呼び掛けをしているものの、利用者からの意見や要望はあまり出てこない。利用料支払いのために家族が事業所に来るので、その際に意見や要望を引き出すように努めていて、内容によっては職員間で議論した上で運営やケアの実践に生かすようにしている。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	月に一度行っている勉強会に管理者も参加し職員との意見交換を行っている。ケアに関することや業務に関することを話し合える場所となっている。	月1回の勉強会(職員会議)において、職員からの意見・要望・提案等が出されるので、議論をした上で変更や改善につなげている。最近の例としては、職員の負担軽減やケアの質の向上を図るために、夕方手薄になる時間帯を2人体制にするようシフトの変更を行った。現在、夜勤の時間を短縮するかどうか、職員の意見を聞きながら検討しているところである。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	個別面談の機会を設け意向の確認をしている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	法人内外の研修受講に関して前向きに検討し、働きながら職員同士での学びの機会を設けている。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	同法人の別事業所との交流を持てるようにしている。		
<b>II. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援</b>					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	入居前にご本人の好みや不快に思うことを確認し過ごしやすい工夫を行っている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	ご家族の困りごとや不安に関して傾聴し、要望に関しても出来る限り対応できるよう心がけている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	ご本人とご家族のニーズを見極め対応できるよう他施設への申請やサービスの説明も行っている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	入居者それぞれの体力や能力の差はあるが、その方が出来ることは継続できるよう、集団生活では無く、共同生活を送れるようにしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	可能な限り、通院はご家族で行って頂くことでご本人の状態を把握し支える関係の共有を図っている。ご家族が来所時には日頃の様子を報告し毎月の行事等での様子をスナップ写真と共に文書にして送付している。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	併設している小規模多機能事業所との交流がある。ご家族と一緒に外出し、買物・外食・墓参りなどもできている。	家族が来て、ドライブや買い物に出かける利用者もいるが、ADLの低下した利用者が多いので外に出かけることを望むことがなくなってきているのが現状である。併設している小規模多機能事業所の利用者とお互いに行き来して、一緒に楽しそうに過ごしていることも時々見られる。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	その時々状況に合わせ、入居者同士で和やかに会話が出来たり、職員が間に入ることでスムーズに関わっている。		
22		○関係を断ち切らない取り組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	入院時や他施設への入居当初はご家族の不安もある為、随時相談等の対応を行う。		
<b>Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント</b>					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	掃除をすることが好きな方には、一緒に玄関掃除をして頂き、そのあと施設周りを散歩し季節の花々を眺める時間を作っている。	意思疎通の困難な利用者が多くなっているため、職員は動きや表情、態度等から要望や意向を汲み取るよう努めている。身体が動いて自ら望む利用者には、掃除や食器の片付け・食器拭きなどの手伝いをしてもらっていて、生き生きとした表情で仕事をこなしている姿が見受けられた。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	ご家族やご本人から、生活歴や今までの環境、趣味等の情報を得ている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	個別ケアを中心に、一人ひとりの1日の流れを把握し、心身状況の変化に対応できるよう努めている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	介護計画は、日々の申し送りや勉強会等で現状や困難事項について話し合い、情報を共有しながら作成している。モニタリングに関しては、全職員で関わっていない。今後も引き続き課題としたい。	介護計画作成担当者は、日々の申し送り・勉強会での職員からの情報・家族からの聞き取り等を元に、介護計画案を作成し、利用者の担当職員に図った上でまとめている。十分なモニタリングができていないのが現状で、今後の改善課題としている。	モニタリングに関しては昨年度の目標達成計画にも挙がっているが、未達成のみである。計画的・定期的にモニタリングを実施して介護計画に反映させる仕組みを作ることが望まれる。
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	業務日誌、申し送りノートを活用し職員間での情報共有はできている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々にも生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	ニーズや状態の変化に伴い、他施設への検討や、医療との連携も図れるよう往診の依頼等も行っている。		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	地域の小学校との交流会や、中・高校生との関わり、ボランティアの慰問、蕎麦打ち等を実施し、懐かしい話を楽しめたり、一緒に身体を動かすことができている。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	ご家族の協力も得ながらかかりつけ医への受診を行っている。細かい情報が必要な場合は、日々のバイタル状況・排泄・水分摂取状況を記入し主治医へ情報提供している。通院が難しくなってきた方には往診の依頼もしている。	受診は基本的に家族が行っているが、家族の都合で職員による受診支援を受けている利用者や、体力の低下で移動が困難になっていたり病院での感染が懸念されること等から往診をしてもらう利用者もいる。受診に際して利用者の体調は口頭で家族に伝え、受診後の結果や薬の変更等は家族から報告を受け、業務日誌に記録し職員間で共有している。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	現在、看護職員の配置は無いが、資格を有している管理者に、介護職員から情報や気づきを伝えその時々に対応している。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院時には病院関係者との情報交換を行っている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	看取りに関してはまだ完璧に行える状況ではないことを伝えている。ご家族の意向を確認し、医療的な処置を希望する場合は医療機関へ。看取り希望の場合は対応したいと考えている。	入居の際、利用者が重度化したり終末期になった時に事業所でできることを説明し、家族の意向を聞いている。利用者の体力が低下し往診を依頼するようになった時点で、家族の意向を再度確認している。看取りを希望の場合は、以前に看取りをした経験を活かし、医師・家族・職員で連携して看取りの支援をしたいと考えている。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	緊急時の連絡体制は整えている。入居者の状態を把握し急変時の対応が出来るよう情報の共有を行い備えている。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	年2回の避難訓練を実施している。近隣が離れていることもあり協力体制は難しいが、一時避難場所として協力を仰いでいる。自治会での消防訓練等の実施は無いと伺っている。施設の避難訓練への参加を呼び掛け地域住民の方の参加を促していきたい。	年2回の避難訓練のうち1回は消防署員立ち合いで実施している。段差のある非常口から利用者をいかに早く外に避難させるかが以前からの課題である。事業所近くの川の氾濫も想定し、避難の判断のタイミングや利用者を車でどのように避難させるかという新しい課題もあるので、実施訓練に積極的に取り組みたいと考えている。	避難の実践を具体的に職員で行ってみて、所要時間等を計測し、問題点を解決できるよう回数を重ねて技術を身につけて、あらゆる災害に備えて欲しい。
<b>IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援</b>					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	ご本人が不快な思いをしないで過ごせるように心がけている。一人ひとりにあった呼びかけや、会話の内容も考慮し対応している。	利用者の呼び方は一律ではなく、呼んだ時の反応や希望で決めている。職員は、丁寧な言葉使用で優しくゆっくり話しかけるように心掛けているが、利用者によっては聞き慣れた地元の言葉も交えている。入居の時に、利用者の日常生活の様子を写した写真を広報紙に載せることを了承してもらった方の写真だけ載せるなど、プライバシーの確保に努めている。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	ご本人の思いや希望を表現し易いように、傾聴しながら言葉を引き出せるように寄り添っている。失語がある方でも、こちらから誘導するのではなく、選択できるような言葉かけを行い思いを表現できるようにしている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	一人ひとりのペースを大切にし、起床時間や就寝時間、排泄の決まりも無く過ごして頂いている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	好みの服を選んで着たり、2ヶ月に1度は、施設に来てくれる理美容の方に散髪してもらっている。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	入居者と一緒に調理はできていないが、一緒に食事をし、準備や後片付けも行っている。好みの弁当を頼んだり、行事の時にはノンアルコールビールやお寿司を楽しんでいる。	昼食と夕食は併設されている小規模多機能事業所で調理専門の職員が作ったものを配膳していて、朝食とおやつは事業所で用意している。利用者は下膳、台ふき、洗った食器をふく等の手伝いをしている。利用者の食べたい物等の聞き取りは難しくなっているが、食べることを楽しんでもらいたいと、時々ファミレスやカフェに行ったり、お寿司や弁当を買ってきて食べる等の取り組みをしている。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	一人ひとりに適した量を配膳し、栄養バランスも考慮した献立になっている。摂取量や水分量のチェックも行い管理している。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないように、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	拒否や抵抗がある場合は無理強いせず、出来る限り毎食後口腔ケアを行い、義歯の状態や口腔内の状態を確認している。		
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	定時排泄では無く、一人ひとりの排泄パターンを見極めトイレ誘導している。移乗介助が必要な方は、夜間は睡眠を優先しオムツ対応している。	立位のできない利用者はオムツを使用しているが、ほとんどがリハビリパンツとパッドを併用し、職員の誘導でトイレで排泄している。入居時は失敗が多かった利用者が、排泄チェック表と職員の誘導でトイレで排泄できるようになった例もある。利用者のふとんや靴に鈴をつけて、夜間トイレに起きる気配を聞き逃さないよう工夫している。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	水分摂取や適度な運動、必要時には便秘薬を使用し排便を促している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	午後に入浴の時間を設け、一人の職員が準備、誘導、入浴、着脱まで行いその方に合った時間配分で支援している。一対一で関わられる時間でもあり、普段は話しにくい会話も楽しめている。	浴室は併設されている小規模多機能事業所と共同で使用しているため、グループホームの利用者は午後一日おきに入浴している。一人の職員が衣服の着脱、入浴、髪乾燥まで全ての介助を行っており、利用者はゆっくり入浴を楽しむことができている。脱衣所は床暖房が完備しているが、寒い時期には浴室を温めておくなど気持ちよく入浴できるよう配慮している。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	部屋の温度や明るさの調整を行い、一人ひとりの就寝のタイミングに合わせている。巡視時には睡眠の妨げにならないよう配慮している。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	薬事情報を確認し、全職員が把握に努めている。服薬の準備も全職員が責任を持ち準備し、症状の変化等への観察も行っている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	掃除、食器洗い、食器拭き、テーブル拭き、洗濯物たたみ等、それぞれに合った役割を作り行ってもらっている。新聞を読む事が日課だったり、雑誌を眺める方、塗り絵に集中している方等、楽しみも継続できている。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	ご家族との外出や、季節毎の外出、天気の良い日にドライブ等行っている。施設周りの散歩は日常的に行っていて、季節の花々を眺めたり、庭先でお茶を楽しむ事もある。	桜・あじさい・紅葉を観に行くなど季節を感じられるドライブや買い物などの外出の計画を毎月立てているが、利用者の体力が落ちてきているため実現できないこともある。計画以外でも、天気の良い日に法人の車が空いていて職員が配置できれば、行ける利用者だけで出かけたりしている。利用者から行きたいところの希望がなかなか出ない状況だが、職員は、事業所の敷地内を散歩しながら草花等を見て少しでも気分転換をして欲しいと願って、利用者に声をかけ出来るだけ外に出てもらうよう努めている。	
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	金銭管理は施設で行っている。本人には現金は渡していない。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	以前は手紙の支援も行っていたが、現在は書く行為が難しくなっている。家族からの電話はご本人と会話を楽しめるように支援している。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	共用のホールからは、プランターに植えられた花々や訪れる鳥達の姿や鳴き声を感じられる。テーブルや席の配置にも配慮し、塗り絵や歌を楽しめたり、隣の和室ではソファに腰掛けテレビを見られる場所となっている。	居間は高い天窓があり、外が見える窓も大きいので部屋は明るく、特に寒い季節は暖かく心地よい空間になっている。居間にはテーブルが2台あり、利用者はほとんどの時間をそこで、歌をうたったり、体操をしたり、ぬりえやトランプをして過ごしている。居間からバリアフリーで続く和室には古い茶箆筒、ソファ、テレビが置いてあり、ここでも寛ぐことができる。掃除がいき届いて事業所全体が清潔である。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	自由に席を移動できるので、数人で集まりゲームを楽しむ事もでき、和室に置いてあるソファに腰掛けテレビを見たり、横になれる場所となっている。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	家族の写真を飾ったり、ぬいぐるみを飼い犬の代わりだとベッドに置いている方も居る。手作りのカレンダーを壁に貼ったり、誕生日のお祝いの色紙を飾っている。乾燥する季節には、タオルを濡らし各居室に干し湿度調整をしている。	居室には利用者それぞれが持ってきたベッド、衣装ケース、ダンス、机椅子、ラジオ等が置いてあり、ぬいぐるみ、愛犬や家族の写真、ぬりえなどの作品が飾ってある。掃除は職員が毎日行うので清潔に保たれている。夜間ベッドから落ちてケガをしないように、ベッドの高さを低くして床に布団を敷いて予防している。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	トイレの表示や居室のドアにネームをつけて分かりやすくしている。目の不自由な方には分かりやすいように大きな飾りをつけている。		